



Title	ヤスパースにおける日常的交わりの教育的意味
Author(s)	中戸, 義雄
Citation	大阪大学教育学年報. 1996, 1, p. 1-7
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/10160">https://doi.org/10.18910/10160</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# ヤスパースにおける日常的交わりの教育的意味

中 戸 義 雄

## 【要旨】

本論文の目的は「日常的交わり」に焦点を当てながら、ヤスパースの教育思想を問い合わせていくことである。「交わり」概念はヤスパース思想の中心概念の一つであるが、先行研究の多くはその実存的側面のみを強調し、そこに至るまでの日常的な交わりを二次的なものと見なしてきた。しかし毎日の生活の中で教育という営為が不断になされ、教育がそこに根づいたものである以上、日常的交わりの意味を問うこととは不可避といえる。

ヤスパースによれば、人間は「可能的実存」であるが、それはあくまでも「可能的」であって、常態ではありえない。実存への途上にある「非実存的」存在、つまりあたりまえの人間同士が生み出し、社会との深い連関のもとでなされる教育の中にはつねに対立や矛盾がつきまと。こういった対立や矛盾は、ただ解消されることだけが問題なのではない。その過程における人間相互のせめぎあいの中に、新たな教育関係を構築する芽が見いだされる。つまり日常的交わりは、実存的交わりと分断されるものではなく、それを常に内に含みながら存在しているといえるのである。

## I 問題の所在

一個人の人間が自己完結的に自己となること、すなわち人間が他のものから隔絶した状態のまま成長することは不可能である。まさに他者とのかかわり、交わりが人間形成にとっての不可欠の条件となることは、経験知としてもわれわれの意識の中にあるといつていいだろう。周知のように、カール・ヤスパース (Jaspers, Karl 1883-1969) はこの「交わり (Kommunikation)」を問い合わせてきた代表的な思想家である。彼の哲学そのものが「交わりの哲学」と呼ばれることからも理解できるように、この概念はヤスパース哲学の大きな柱の一つであり、彼の思想を教育学的な視点からとらえる際にも、交わり論は中心的なテーマとなってきた。教育学の論議の中でヤスパースの交わり論が問い合わせられてきたのも、このように考えれば当然の結果ともいえる。

しかしながら、これまでの先行研究の多くには、共通して次のような特徴が認められる。まず、交わりを遂行する者相互の同質性・同等性がほぼ無条件に前提とされていること。つまり、両者の質的差異をめぐる問い合わせ、同質性・同等性にかかわる過程に関する論究があまりみられないこと。そして何よりも、もっぱら「実存的交わり」のみに焦点が当てられ、その他の交わりが極端に軽視されていること、などである。これらは言い換えれば、「大人の」あるいは「稀有な」交わりを論じることに終始しており、いわば「究極の」交わりだけが教育において問題であるかのような印象を与えている。それには交わり論をただ応用させる形で教育学の文脈の中にもちこんできたことに、一つの原因を求めるができるのではないだろうか。「私ができるだけ多くの人々と交わりをもとうとするならば、私はおそらく交わりを破壊するであろう!」<sup>1)</sup>というヤスパースの言葉は、とりわけ慎重に受けとめられなくてはならない。ここでいう交わりとは、言うまでもなく実存的交わりを指すものであり、この交わりがもつ「深さ」とは表裏一体の関係にある、

不可避的な「狭さ」をあらわしている。一対一人間関係が教育の基本構造であることは否定できないにせよ、学校教育などにおける一対多ないし多対多の人間関係をも一般的なあり方としてもつ教育的関係を看過することは許されない。それゆえに、実存的交わりを交わりの全てであるかのように拡大解釈し、それを教育現実に「当てはめる」ことはこういった意味からも避けられるべきであるだろう<sup>2)</sup>。

そこで本稿においては、これまで等閑視されてきた感のある交わり、つまり「日常的」交わりを中心と論じながら、相互の同質性を前提としない非同質的な交わりについても考察し、ヤスパースの交わり論を問い合わせていく。毎日の生活の中で教育という営為が不断になされ、教育がまさにそこに根づいたものである以上、日常的交わりを問うことは不可避といえる。ヤスパースによれば、人間は「可能的実存」であるが、それはあくまでも「可能的」であって、常態ではありえない。実存への途上にある「非実存的」存在、つまり「あたりまえ」の人間同士が生み出し、社会との深い連関のもとでなされる教育の中にはつねに対立や矛盾が存在する。こういった対立や矛盾は、いわば必然的なものであり、否定的なものとして取り除くことで問題が解決するわけではない。その過程における人間相互のせめぎあいの中に、新たな教育関係を構築するための鍵が内包されているのである。また本稿は、「大人」と「子ども」との関係を視野に入れた教育学的な交わり論を構築するための基礎理論として位置づけたいと考えている。

## II 日常的交わりのもつ意味

ヤスパースの交わりがもつ構造を概観するためには、現存在、意識一般、精神、そして実存という彼の提示する人間の存在様態との関係をまず確認しておく必要がある<sup>3)</sup>。交わりには、それぞれの存在様態に対応しながら、現存在の「原初的共同性における交わり」を基底部に置き、意識一般の「即物的な目的性と合理性における交わり」、精神の「理念的に規定された内容の精神性にもとづく交わり」、そして実存そのものと不可分の関係にある「実存的交わり」があげられる。ここにはピラミッド的階層構造を認めることができるだろう。すでに述べたように、従来の論議で取り上げられてきたのは、この究極的な実存的交わりが中心であった。ところが現実の社会、教育の場面においては、この実存的交わりにいたるまでの交わり、いうなれば日常的交わりが圧倒的な部分を占めていることは疑問の余地がない。それぞれの交わりは多様な形態を取りながら存在しており、実存的交わり以外を「非本来的」な通過点に過ぎないとしてなおざりにすることは、豊かな交わりを教育現実において実現するうえでもとうてい容認できることではない。

より具体的に日常的交わりのそれぞれを分析してみると、次のようになるだろう。人間が社会に生きるものである以上、自己を意識的に閉ざすことさえしなければ、生活を営むことの大半が、すなわち日常的な交わりを遂行していることであるといえよう。さしあたっては「現存在の交わり」が中心となる。この現存在の交わりは人間の生存そのものを左右する大きな意味をもっている。なぜなら、現代社会の中で孤島のロビンソン・クルーソーとして生きることは不可能に近いからである。ただ逆にいえば、機能的側面が強いこの交わりにおいては功利性が優先されており、その性格ゆえに、次の意識一般の交わりと並んで、今日もっとも支配的な交わりの形態と言わざ

るをえない。私たちの人間関係が、他者を結果的には事物であるかのように扱うことが多いという事実は、明らかにこの証左なのである。そして、ある対象に対して他者との関心の一致を見るときに、それは「意識一般の交わり」となる。ここでようやく、目覚めた意識をもった人間としての他者および私が姿をあらわすといえるが、それは「意識が対象なしにはありえないように、自己意識は他の自己意識なしにはありえない」<sup>4)</sup>ためである。しかし、この段階においても交わりの関係にある相手だけではなく、私自身も代理可能な存在にしか過ぎない。そしてヤスパースが「内容豊かな交わり」と評した「理念のもとでの精神的交わり」へは、国家、社会、家族、大学および職業といった共同体によって私たちは導かれるのである<sup>5)</sup>。しかしこにおいても存在者の代理可能性は変わらない。こうして、唯一無二の私という存在を顕現するものとして「実存的交わり」のもつ意味が際立たせられるのである。

このように見えてくると、交わり相互の関係はピラミッドの階層レヴェルの相違であり、調和的で上方指向的なものとして受け取られる。人間は誕生後、現存在としてのあり方から自我の誕生により意識一般へと開かれていくように、交わりと人間形成の過程とがパラレルに展開される側面はたしかに存在する。だがそれだけの理解では、実際に生じている交わりを十分に把握しているとはいいがたい。むしろこの階層構造は一方向的で不可逆的な行程ではなく、行きつ戻りつする中でそれぞれの交わりが独自の意味をあらわにする。たとえば日常的交わりに共通する代理可能性という性質は、通常否定的な評価しかなされない。しかし実存的交わりのもつ回性ゆえの閉鎖性・排他性を考えた場合に、この代理可能性を日常的交わりに備わった開放性として積極的に認めることがあながち不当ではないだろう。毎年のように入れ替わる生徒たちに対して、教師が一定の人間関係を築くことができるのも、実存的交わりにはないこの性質のゆえなのである。そしてヤスパースが実存を「先行する交わりのすべての段階に結合されて現象しながらも、実存はそれらの交わりのいずれかの内にも閉じこめられない」<sup>6)</sup>と述べるときに、これらの交わりの関係が描きだされる。つまり実存的交わりは交わりの階層構造の最上部に位置するだけではなく、この交わり全体を貫いているのである。こうして、日常的交わりと実存的交わりのもつ相補的なあり方が明らかになってきた。

「経験的な現存在としてさえ、すでに私は他の現存在を通してのみ交互作用のうちに存在する。人間は誕生と遺伝のみによってあるのではなく、彼に彼の世界をもたらす伝達によってはじめて現実の人間となる」<sup>7)</sup>というヤスパースの言葉からも、日常的交わりのもつ根源性は明らかである。よく知られたアマラ・カマラといった野生児の例をもち出すまでもなく、人間であるためには生物的・物理的な誕生を経験するだけではなく、人と人との交わりの中にあってこそ人としての誕生を迎えることができるといえる。つまり、人間は通常そのはじまりから交わりの中に生きているといつても過言ではない。けれども、それが即座に実存的交わりにつながっていくことは現実的にいっても困難である。過程的な性格を帯びながらも、私たち人間は日常的交わりに生きるのである。

しかしながら今日では、この日常的交わりからも逃避する人間が少なからずあらわれてきており、その多くを占めるのが思春期を中心とした若者たちといえる。それは、いじめや受験の失敗による挫折などを契機として不登校になり、ついには自室に閉じこもったきりで家族とも顔をあわせないという状態が数か月、長い場合には数年も続くというものである。表面的にはたしかに「過

程を欠いた自己存在は生ける屍のようなもの<sup>8)</sup>と私たちには見えるのだが、彼らの多くは日々葛藤し、苦悩し続けている。不本意ながらも自己を閉ざしてしまった彼らにとって、他の人間から見れば「取るに足りない」交わりが自分を取り囲む大きな壁となって眼前に立ちあらわれてくる。その後周囲からの援助も受けながら、この殻の中から抜け出すことを目指していくのであるが、決して容易な道程ではない。このように見てくると、人間の誕生時、また誕生の後でさえも、人間が交わりを遂行することは、それがたとえ無意識の日常的な交わりであっても、決して自明であるとは言い難いであろう。私たちにとって、その交わりの中に生き、そして踏みとどまることが必要なのである。

ところでヤスパースは、「素朴で実質的な共同体の場合では、自己自身に据えられた自我が限界」であり、「代理可能な点としてのこの自我と他の自我との交わりでは、この全体性を包越する理念が限界」であり、「理念のもとにある交わりの限界が実存」であるというように、交わりにおける不完全性・不満の経験が人間を異なるレベルの交わりへと導き、最終的には実存的交わりに至らせるものであるとしている<sup>9)</sup>。しかし、交わりにおいて不満を感じることがそのまま階層移行の契機であるととらえるだけでは、その全体像を把握したことにはならない。現状停滞を招き、時として不毛でさえある不満から、決して自由ではないことを、私たちはよく知っている。不満がそのまま飛躍へのエネルギーではありえない。むしろ、それぞれの交わりをまさに生き抜き、そこによく見えてくる限界に対しての不満であることが条件となるのである。

### III 交わりをめぐる同等性と同質性

交わりは教育のあらゆる場面で生起する現象といえるが、実存的交わりをも含み込んだ交わりの全体像が浮き彫りになるのは、とりわけ対話を基本とした教育の場合であると思われる。ヤスパースは教育の基本的な形態を、伝達行為に限定されるスクラ的教育、偉大な人物の指導のもとになされるマイスター的教育、そして教師と生徒とが同じ地平に立つ助産婦的行為を中心としたソクラテス的教育の三つに大別しているが、ソクラテス的教育を支えるものこそ紛れもなく対話なのである。そしてこの教育を実践する場として考えられているのは、『大学の理念』の中の彼の記述からも明らかなように、主として大学なのである<sup>10)</sup>。それはこの段階であれば、他の学校段階と比較して、教える者と学ぶ者とは 様々な点でかなり近い地平に立っている、あるいはほぼ対等な人格として両者が向かい合うことも可能であるということに理由を見いだすことができよう<sup>11)</sup>。たとえばザラマンンも「他者の原則的な同等性 (Gleichrangigkeit) を是認することへの訴えかけ」についての考察の中で、実存を実現する前提としてこの同等性をあげている<sup>12)</sup>。しかし逆に言えば、このように自己と他者との同等性がことさらに問われる背景には、交わりにおけるこの同等性が実は獲得されがたいという事実があるのでないだろうか。

大人であっても各個人の社会的地位や経験には大きな隔たりがある。それゆえにこの同等性のもつ意味が際立たせられてくるといえる。さらにいえば、乳幼児を典型とするような、大人との格差があらゆる面で大きく、非同等性の度合いが著しい場合には交わりの成立はきわめて困難であることが予想される。しかしながら、人間の発達にしたがって幼少期を経て青年期となり、年令格差が相対的に縮小されなければ全ての交わりが自ずと可能になるとも考えがたい。同等性を

実現するためには「他者と同じように、他者とともににある」<sup>13)</sup>ことが不可欠といえる。たとえば母親と幼子とのふれあいを見れば、私たちはそこに、功利性の原則に立った現存在の交わりにとどまらない交わりの存在を認めないわけにはいかない。この「ともにある」ことを、その根拠の一つとして示すことは不当とはいえないだろう。ただ、このともにあることは決して容易ではない。物理的・空間的に一緒にいることで達成されるのではなく、精神的側面からも場を共有する必要が迫られているからである。終末期（完成期）医療の現場でこの問題は先鋭化の度合いを増す。家族のみならず医師や看護者といった医療者がターミナル期にある患者と「ともにある」ことが、患者ひいては医療者本人に対して大きな意味をもたらすことはこれまでの多くの事例が物語っている。しかし、限界状況にあってともにあることはまさにその存在を賭けなければ不可能であり、医療者の側にも精神的・肉体的に苛酷な負担が要求される。

ところで、現代においては従来にもまして子どもを理解することが困難で、大人にとって子どもが見えなくなってきたといわれている。自分たちがもつ価値尺度で測りきれない子どもたちを前にして、親や教師は途方に暮れているのである。これまでの文脈に即していいうならば、「大人」と「子ども」とが社会的な状況の変化によって、ともにあることが難しくなっていることにその一因を求めることができるだろう。このともにあることを通して同等性のもとに立つということは、実存への前提にすぎないというよりは、すでにそれ自体にも大きな意味が含まれているといえる。同等性の獲得に至るまでにはさまざまな障害を克服しなければならないが、教育のおこなわれている場はその過程そのものもあるといえよう。

さて、交わりにおいて他者との同等性がめざされるものであるとするならば、もう一方の同質性についてはどうであろうか。各自がかけがえのない独自な存在であることは、それがたとえ現代においても理念の段階にとどまっているにせよ、否定しがたいものではある。だが現実には「ある存在を全体として評価し、総決算をし、清算するかぎり、もはや私にとってそのものは実存ではなく、心理的客体か精神的客体にすぎない」<sup>14)</sup>のであり、他者が悪しき同質性の範疇に押し込められている。一般には、他者を自分とは違うというレベルでその他者性を認識するにとどまり、結局はすべての他者を同質化してしまっているのかもしれない。戦後のわが国の教育において「個性尊重」が重要なスローガンであり続けてきたのは、こういったことに対する危機感のあらわれであるとはいえないだろうか<sup>15)</sup>。

ところが、先に述べた同等性が他者との交わりにおいて獲得されてくるとすると、今度は逆に同質性に解消されえない他者の固有性が顕在化してくる。このことで交わりにおける新たな問題が生じる。つまりそれは、固有性を背景にした双方の交わりの質的な違い、すなわち「すれ違い（Vorbeigehen）」<sup>16)</sup>が起きやすくなるからである。それぞれの交わりの段階での限界に対する不満を、より高次の交わりへと進んでいく原動力とみなすことはすでに確認した。ではこの「すれ違い」に積極的な意味は認められないだろうか。「ともにあること」を仮に成したとしても、個人間の差異は多くの点で依然として存在する。教育の場面に限らず、人間関係の中でのこのような差異はむしろ必然的なあり方といえるもので解消されるべきものではない。交わりにおける「すれ違い」はその交わり自体の存在を否定しかねない危険をはらみつつも、同時に、認識の枠組みを問い合わせその転換を促すという、交わりのダイナミズムを生み出す鍵が隠されているといえる。自立した「大人」を中心にして論じられてきた感のある交わりの問題は、この「すれ違い」がも

つ意味を再認識することによって、より現実にコミットした、誕生から老年期にいたるまでの生涯を視野に入れた人間形成の相のもとにその位置を占めることになるのである。

#### IV おわりに

以上のようにヤスパース思想の検討を軸に、従来問われることの少なかった日常的交わりを中心に論じながら、そこで問題となる相互の同等性・同質性についても考察してきた。この考察を進める中で、矛盾や葛藤をも含んだ動的な生きた交わりを問うことの重要性は明らかになってきたのではないだろうか。実存的交わりの深さも日常的交わりの広がりと不可分であり、教育的交わりが実り豊かなものとなるためにも、両者の相互補完的なあり方を模索しなければならない。さらに、存在論的な側面からのみヤスパースの思想にアプローチするのではなく、形成論的な意味をそこからどう読み取り、現代に生きる私たち自身の問題としてとらえていくかは、今後に残された課題である。それは、ヤスパースが自らの生きた経験の中で交わりの意義を問うたことにも深く通底するものであると思われる。

#### 注

- 1) K.Jaspers, *Philosophie Bd. II*, Berlin u.a., 4.Aufl. 1973, S.60.
- 2) たとえば齊藤武雄は『ヤスパースの教育哲学』の中で、教育方法としての交わりを実存的交わりと同一視している。齊藤武雄著『ヤスパースの教育哲学』、創文社、1982、137頁参照。
- 3) より厳密に言えば、これらは『理性と実存』(1935)以降に展開される包越者論において包越者の諸様態として位置づけられるものである。しかし、本稿は主著『哲学』(1932)の第2巻「実存開明」を中心的に論を進めているため、成立年代を考慮し、このように記述する。
- 4) K.Jaspers, a.a.O, S.55.
- 5) *ibid.*, S.53.
- 6) *ibid.*, S.55.
- 7) *ibid.*, S.55f.
- 8) *ibid.*, S.70.
- 9) *ibid.*, S.54f.
- 10) K.Jaspers, *Die Idee der Universität*. Berlin u.a., 1963, S.84f.
- 11) しかしながら、ヤスパースが『大学の理念』(1946)を書いた当時のドイツにおけるエリート層中心の大学の状況と、今日のわが国における大衆化された大学の状況との相違は無視できないものがある。
- 12) ザラムン著、増淵幸男訳『カール・ヤスパース』、以文社、1993、112頁。
- 13) K.Jaspers, *Philosophie Bd. II*, S.85.
- 14) *ibid.*, S.95.
- 15) この問題に関する現在の議論については以下の文献を参照。  
森田尚人ほか編『教育学年報4・個性という幻想』、世誠書房、1995.
- 16) K.Jaspers, a.a.O, S.57.

## Educational Significance of Everyday Communication in K. Jaspers' Thought

Yoshio NAKATO

The purpose of this paper is to reassess Jaspers' thoughts on education, focusing on daily 'Communication' which is a key concept in Jaspers' philosophy. Most studies on 'Communication' conducted so far have emphasized only its Existential aspect, considering simple everyday communication which is not yet Existential as secondary. However, because education has its roots deep within everyday life and takes place all the time, it is necessary to inquire into the significance of daily communication.

According to Jaspers, human beings are constantly in a state of 'potential Existence' (mögliche Existenz) which, however, does not manifest itself in our usual state. Education is provided by ordinary people who must always be in the process of realizing their 'potential Existence'. It is also always provided in connection with society. Thus education has always conflicts and contradictions. The question is not simply how to resolve them, but more importantly how to re-establish our educational relationships in the process of dealing with these conflicts and contradictions. That is to say, daily communication invariably includes Existential Communication, and the former cannot be separated from the latter.